

# 立命館在職三十二年の回顧

足 立 政 男

## はじめに

古人が「光陰矢の如し」とか「月日に関守りなし」とかいつて、月日の立つのは早いものといふことを戒めているが、わたくしが立命館大学に就任して今年で満三十二年在職したことになる。三月三十一日で無事停年退職を迎え、親愛なる同僚の諸学兄によって、わたくしの退職記念号の学会誌を刊行していただくことになり、まことに光栄と感謝とで感慨無量である。

わたくしは偶然にも、新制大学としての経済学部第一回生入学の創立期にあたる一九四九年四月に立命館大学経済学部にて御世話になったから、わたくしの立命館における経歴は、経済学部のあゆみとともに綴られてきたといつても過言ではない。その意味で曖昧模糊として記憶はうすれ、ボンヤリしている点もあるが出来るだけ思い出し、三十二年間の回顧録を綴って見たいと思う次第である。

## 一 新制大学発足期

一九四九年当時の立命館大学経済学部は広小路通寺町東入る、御所の最寄りにある梨木神社と寺町通りをはさ

んだ東隣りにあり、旧制学部として法学部とともにすでに五十年近い古い歴史と伝統をもち、年こそ若いが文学部と共に旧制の三学部が存在し、さらに、それぞれの学部とやらんで専門学校が併設されていた。そしていわゆる大講義は学部と専門学校とが合併して行われ、一・二部間の転部も自由であり、今日のような制度はなかった。一九四九年は日本にとって学制大改革の年で、旧制大学、旧制専門学校を廃止して、現行の四年制大学にはじめて一回生の新入学生を迎え入れた年であった。

したがって、大学当局も新制度の大学に切り替える諸制度の整備に大わらわであった。経済学部の専任教員も教授・助教授・講師(大学・専門学校合わせて)合計して二四名であったし、法学部・経済学部の事務室も、先生方の控室も共に中川会館の一・二階を共同で使用していた。

中川会館の二階には大きな火鉢が一つ置かれ、これをコの字型にソファーで囲んである小部屋があって、これが教員の控室になっていて、ここで講義時間の待ち合わせが行なわれ、先生方の茶話もここにかわされていたのである。教授会といっても、全員で二四名であるから、余り会議様式の喧嘩がくがくの討論といったものではなく、当時長期にわたって勤められていた学部長井上次郎教授の下で、次から次と提案されて来る難問に対処した、実に小じんまりした教授会であった。

一九五〇年(昭和二十五年)になると、大学院経済学研究科修士課程経済政策専攻(全日制・定時制)と短期大学部商科(昭和二十五年四月～二十九年三月)ならびに、専門学校経済科別科が開設されたのである。

ここでは専門学校別科制度に一言ふれておくことにする。この別科制度というのは、旧制中等学校卒業者は修業年限による資格で新制大学の入学資格を喪失したため、その資格を取得せしめて、これを学部を受け入れるた

めに設置した過渡的措置の一種である。私も商業史を講義した覚えがあるが、後に有為の人材がこの別科の出身者から輩出していることはまことにうれしい限りである。一九五三年三月に至り、別科はその任務を終了したと見做されて廃止された。

さきに設置された短期大学部商科も四年制大学における教学の一貫制と、その充実という趣旨のもとに発展的に廃止が行われた。時に一九五四年三月であったが、ここに経済学部は四年制一本化の体制でもって、教育研究の一層の充実に専念することが可能になり、今日における学部教学の基礎が一応完成を見たのである。

一部・二部ともに卒業生も急増し、一九五六、五七年は八〇〇〇名余りとなり、在学生は学部の収容力を超過し、大講義も超満員であり、後にマスプロ教育のシンボルになった。一〇〇〇〇名を収容しても講義が可能な研心館が建てられたのもこの頃であった。

このマスプロ教育も数年で終わるのであるが、日本の戦後におけるインフレ経済の中で、大学教育の大衆化に見合った相対的低学費と、庶民の大学を旗じるしにして、学園の教学拡充の財源を確保する一大培養源となり、立命館大学が総合大学として発展する基盤を形成した一面の事実は見逃すわけにはいかない。

## 二 経営学部の創出と大学院

立命館大学の名声と、それにとまらぬ経済学部教学の充実による志願者の急増と、当時の国民的な要請に对应して、一九五三年、学部の中に経済学科と経営学科の二学科を開設したが、このうち、経営学科は恰度一〇年後の一九六二年四月に至り、経営学部として分離独立した。これは経済学部発足以来の画期的な大改革であった。

一九六〇年、六一年はこの経営学部を分離独立させるため、生みの苦しみを味った年である。学部を出て新設学部に移る教職員と、残留して経済学部の伝統を守らねばならない者との、別離の悲しみは今もって思い出の一言となっている次第である。しかし、これも立命館大学発展の第一歩であり、その基礎となった功績は実に大なるものがあると確信している次第である。

一九六二年四月いよいよ経済学部経営学科は分離独立し、現在の経営学部が開設されたのであるが、その誕生の経緯から、経営学部は経済学を基礎とする経営学の専攻を理念とするもので、二学部は異体同心的な特色をもっていたのである。

かくして経済学部も、経済学一本の学部となり、学部の拡充は急速にすすみ、その余力をもって大学院の改革と取組むに至るのである。

すなわち、一九六四年に至り、さきに開設されていた大学院の経済学研究科経済政策専攻を廃止し、大学院経済学研究科経済学専攻が開設された。私も当時は井上晴丸学部長の補佐役である学部主事を仰せつかっていて、大学院開設の人事や、申請手続でいろいろ苦勞したが、当時、認可を厳しくしていた文部省の資格審査も無事切り抜け、修士課程と同時に博士課程を増設し得た喜びは、今もって忘れることが出来ない。ただ残念なことは後年、井上晴丸教授が在職中に御他界されたことである。

なお、特記すべき今一つの改革は、一九六三年の二部統一事務室の設置である。すなわち、全学二部学生の事務を学部から切り離して統一し、二部事務室で取り扱うといった現行制度であり、これに伴って学則の大改正も行われた。

経済学部の二部もこの改革により、一部の教授会と事務室から二部が切り離され、その教学は、各学部選出の二部専任教員をもって構成する二部協議会と二部事務室の下で運営されることになったのである。

この大改革はやがて次に起きる、経済・経営両学部の一部のみ（二部は広小路残存）の衣笠キャンパス移転を容易にしたことも事実であったし、反面、経済・経営の一・二部を分断したマイナス面を惹起したことも事実であった。

今一つの画期的教学上の出来ごととは、今日立命館教学の特色の一つになっている「小集団を軸とする教学」体制の発足である。すなわち、一九六四年の四月から、プロセミが開講され、一回生から四回生に至る小集団教育が一貫して行われるようになって、教学の一層の充実が図られて今日に至っていることである。

### 三 衣笠への学部移転

つづいて、一九六五年四月には立命館大学開学以来幾十年、住みなれた思い出多い広小路キャンパスを後にして、緑も豊かな衣笠キャンパスの新天地に、立命館学園百年の大計を果すべく、一拠点政策の先陣を切って、経済学部は兄弟学部である経営学部と一緒に移転を断行した。

衣笠は京洛の画家が「花鳥浄土の地」と名づけていただけに、春夏秋冬季節の移り変わりに応じて、小鳥の囀る声にも趣きがあり、ことに、秋の紅葉から冬の雪景色は実に美しい。当時、等持院の森をくぐり抜けてキャンパスに着いた途端、松の緑でゆるやかな稜線を描く衣笠山の美景に魅せられて、思わず嘆声をあげることもしばしばであった。今では学舎が建てこんで昔の趣きはなくなりつつあるが、それでも空気は澄んで、真珠の微粒を

ふくんだようにうるおいに満ち、四季の微妙なささやきやおとずれは五感を通じてしずかに味うことが出来る。キャンパスとしてはまことに好個の地である。

十年一昔という言葉があるが、当時の経済学部 of 先生方も今では十数名を残すだけで、物故された先生が多く淋しい限りである。当時、移転に苦勞された井上晴丸教授(昭和三八年学部長)、高橋良三教授(同三九年学部長)の御二人とも亡くなられて、誠に残念である。なお、わたくしは当時、井上学部長の下で学部主事をさせていただけに、感慨一しおのものがある。

さて、経済・経営の両学部が一緒に移転の先陣を勤めたのは、さきにも述べたように経営学部の誕生がわが経済学部から経営学科が分離して生まれたものであり、いわば骨肉を分け合った親密な間柄で、学部設立の建前が「経済学を土台にした経営学を研究教育する」といった学部であったため、両学部を衣笠と広小路に引き裂くことは教学上大きなマイナスになるからであった。

しかし、このような親密な二学部が存在し、先陣学部として同時に移転出来たことは、衣笠一拠点を志向していた立命館学園にとっては、まことに幸運であったと言える。両学部が移転して、全学移転への地ならしをして、産業社会学部・文学部・法学部と残存学部の移転をスムーズにし、その吸引力となった功績は不滅のものであると信じている。

ところで、少し理屈っぽくなるが、衣笠移転に至る経緯についての思い出を少し綴っておくと、およそ次の如くである。

時あたかも井上学部長で私が学部主事であった一九六三年(昭三八)六月一五日の第二八八回大学協議会で決

定された「学園振興基本要項」に基づいて、同年七月二〇日の教授会で学部移転について最終の審議が行われた。その日は忘れもせぬじりじりとした暑い日であった。中川会館（広小路）では、延々七時間にわたって、移転の可否が検討された。最終の賛否両論で、まことにきびしいものがあっただけに、移転の協力を要請する学部長、学部主事（わたくし）としては、それまで幾度も教授会で積み重ねて来た議論の成果を整理しながら、教授会が全員一致で衣笠移転の了承を得るまで精神を傾けたもので、今でも忘れ得ぬ思い出の一頁として髣髴として当時の会議の様子が蘇ってくる。

要するに、両学部の衣笠移転は、法・経・営・文の四学部は狭隘な広小路キャンパスに見切りをつけ、教育研究の諸条件を充たすために衣笠へ移転し、衣笠を一拠点とする総合大学を実現すべしといった結論にしたがって、その先陣の役割を果たしたものであった。

来たる一九八一年四月からは全学部が衣笠に結集し得て、創立八〇周年の祝賀式典が開かれることになっているが、この衣笠一拠点への先鞭をつけた一九六三年当時を思いおこすとまことに感慨無量のものがある。

#### 四 大学紛争以降

一九六九年一月に全国的規模で大学紛争が起り、わが立命館も不幸にしてその渦中に巻きこまれた。したがって経済学部も教学上に一大支障を来たしたのである。

恰度、わたくしは当時の入試副委員長であったため、無事入学試験が完遂出来るかどうか日夜苦悩したものである。ことに入試委員長（教学担当理事＝天野法学部教授）が辞任後は入試の責任者として、入試本部を設置した広

小路学舎が紛争の中心になったため、これを衣笠学舎に移したり、入試問題の保管、答案用紙の保管、試験場の確保、採点の無事進行等々、難問題が山積したが、全学あげての協力を得て無事終了が出来たことは何よりの喜びであった。

しかし、全立命の教職員はもちろんのこと、経済学部の教職員は日夜をわかず、その解決に全力をあげたが、この学園紛争は後年に至るまで大きな傷口を残す結果となり、教職員に多くの物故者を出すに至った一大原因にもなったとすら考えられる。

わたくしも当時、もし入試に故障が発生した場合は即座に大学を辞任すべく、辞表を懐にした毎日の勤務であったが、無事入試の完遂を見て、今日こうして円満停年退職の日を迎え得ることが出来たことは誠に幸運の極みであったと思われる。

## 五 学部長時代以降今日まで

一九七〇年四月の学部長に手嶋正毅教授が就任されたが間もなく病魔に犯され逝去されたため、わたくしが六月から学部長の任についたが、その年の一〇月学費値上げが提案された。当時は学園紛争直後のこととて、学生の精神的荒廃も未だ回復せず、学校対学友会の対立もすさまじく、学部団交、全学団交等が行われ、石のような紙つぶてが学部長理事目にかけて投げ付けられ、その一つが頬にあたって思わず悲鳴をあげたが、今も忘れ得ぬ思い出の一コマである。そして、翌七一年四月に学費改定が行われたのである。

なお、一九七〇年一月、故末川総長が辞任され、新しく制定された総長公選制度の下に、初代総長として経済



学部から故武藤守一教授が選出され、翌年亡くなられるまでわたくしは学部長理事として、先生と行動を共にしたが、これも思い出の深い一つであり、その学園葬は悲しい出来事として忘れ得ないものがある。

一九七三年一〇月に再び学費値上げの提案が行われ、時の学部長関弥三郎教授も大変御苦労された末、一九七四年度から学費改定を見た。

以降、学費改訂は数度繰り返えされて今日に至っているが、たまたまその年度に就任された学部長の御苦労は筆舌に尽し難いものがあり、ここにあらためて敬意を表する次第である。

一九七九年一月には吉日を卜して塩田庄兵衛学部長の下で新制経済学部三〇周年祝賀の式典が行われ、学部長者の故をもって、わたくしが経済学部三〇年の思い出を講演し、わたくしの立命館大学、ことに、経済学部勤務に一つの区切りをつけ得たことは何よりも幸せなことであった。

## おわりに

およそ時は一切のものを創造し、また、一切のものを変化せしめるものである。しかも、歴史的な時は過去から今に至り、さらに、未来に継続して無限に流れて行くが、繰り返したり、再現したりすることが出来ないものである。一九四九年に立命館大学経済学部に着任したわたくしも後数ヶ月、三月三十一日には停年退職の日を迎えることになる。新制大学としての経済学部の年齢がわたくしの勤務年数でもあり、満三二年になる。楽しかったこと、嬉しかったこと、また、苦しかったこと、悲しかったことが走馬灯のように去来し、今はじっと来し方の歳月を見つめながら静かに暮しているのが昨今のわたくしである。

おわりに臨み、故人となられた先輩の諸先生方の御冥福をお祈り申し上げると同時に、欠陥だらけの至らぬ私を停年退職の日まで深い友情でお守り下さった同僚諸学兄の先生方に満腔の謝意を表し、あわせて、経済学部の益々の発展を祈念して止まぬ次第である。

さよなら